

日本語の使役助動詞「せる」「させる」の活用の五段化の現状

阿部 義隆

(言語文化学部 日本語専攻)

キーワード：使役助動詞，異形態，五段活用，使役受身形，他動的使役

1. はじめに

日本語の使役助動詞には「せる」「させる」の2種類があり、これらは接続する動詞の活用の種類によって使い分けられる異形態である。いずれも活用型は下一段型である。しかし現在、これを五段型で用いる用例がみられる。本稿では、日本語の使役助動詞「せる」「させる」が五段活用化したものの30歳未満の人による使用の実態について、2020年現在での傾向を調査した結果を報告する。

本稿で筆者が論を展開するにあたり、次のことがらを指す用語を以下のように定義する。あくまでも本稿での説明のために筆者が定義したもので、一般的な呼称ではない。

- ・動詞に使役助動詞が接続したもの： 「使役助動詞がついた動詞」
- ・五段活用¹する使役助動詞： 「五段活用化した使役助動詞」

2. 先行研究

先行研究間で使役の助動詞についての呼称が異なっているが、先行研究の要約や引用においては、各先行研究で用いられている呼称を用いる。

2.1. 日本語記述文法研究会 (2009)

以下、日本語記述文法研究会 (2009: 257–261) を要約して示す。

2.1.1. 使役とは

使役文の述語は、「歩かせる」(aruk-ase-ru)、「着させる」(ki-sase-ru)のように動詞の語幹に-(s)ase-ru という接辞を付加してつくられる。一般的な使役文は、対応する能動文には含まれていない人や物を主語として、能動文の表す事態の成立に影響を与える主体として表現する。

例：父親が子どもにテレビを消させた。

例文は、「父親」が指示を与えることで、「子供がテレビを消す」という事態が起きたことを表す。このように使役文は、主語として表される使役者 (使役の主体) が能動主体 (動きの主体) に働きかけ、それが原因となり能動主体に動きや変化を引き起こす事態を描き出す。

¹ 動詞の活用の種類の1つで、「活用語尾が五十音図のア・イ・ウ・エ・オの五段にわたって変化するもの」(湯澤 (1953: 45)) である。

2.1.2. 使役の接辞の縮約

使役の動詞には、「歩かす」(aruk-as-u)、「着さす」(ki-sas-u) など、その接辞が-(s)-as-u という縮約形を取るものが多い。一般に I 型動詞²の使役受身文では縮約形が用いられることが多いが、II 型動詞³の使役受身文ではやや落ち着きが悪い。

- ・歩かせられる (aruk-ase-rare-ru) - 歩かされる (aruk-as-are-ru)
- ・着させられる (ki-sase-rare-ru) - ? 着さされる (ki-sas-are-ru)

2.2. 湯澤 (1953)

以下、湯澤 (1953: 137–139) を要約する。

使役の助動詞「せる」「させる」の活用はいずれも下一段活用⁴型で、「せる」は未然・連用・終止・連体・假定・命令の順にせ・せ・せる・せる・せれ・せろとなる。「させる」は同順にさせ・させ・させる・させる・させれ・させろとなる。命令形にはそれぞれせよ、させよという形もある。この活用を、「読まして」「書かす」などのように五段活用として用いる人が多くなってきた。特に連用形、終止形、連体形でそれが多い。

2.3. 森田 (2007)

森田 (2007) によると、「せる」がついているからといってすべて使役の助動詞がついてるとみなすとは限らないという。以下の例は元来他動詞として存在していたが、他の使役表現形式⁵の影響で「～せる」の形ができたものである。

- ・例：浮かす>浮かせる、飛ばす>飛ばせる

3. 問題点

日本語記述文法研究会 (2009)、湯澤 (1953) のいずれも、どの動詞のどの活用形で五段活用化した使役助動詞の頻度が高いのかが明確に数値などで記されていない。

4. コーパスによる素頻度調査とその調査方法および結果

筆者は、「使役助動詞が用いられる頻度が高い動詞ほど、その動詞に接続した使役助動詞が五段活用になりやすい」という仮説を立てた。これに従い日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)、日本語話し言葉コーパス (CSJ) を用いて、使役助動詞がつく頻度の高い動詞を抽出した。BCCWJ は記号などを除き計 1 億 491 万 1,460 語収録している。対して CSJ は、記号などを除き計 757 万 6,046 語収録している。

使役助動詞がつく頻度が高い動詞の抽出と集計は以下の手順で進める。

² 五段活用動詞を指す。

³ 上一段活用、または下一段活用動詞を指す。上一段活用の活用語尾は、「五十音図のイの段の音と、それに「る、れ、ろ (よ)」の付いたもの」(湯澤 (1953: 48)) である。

⁴ 動詞の活用の種類の 1 つで、「五十音図のエの段の音と、それに「る、れ、ろ (よ)」の付いたもの」(湯澤 (1953: 51)) である。

⁵ 2.2 節の湯澤 (1953) で「使役の助動詞」と表されたものと同一内容である。

- ① BCCWJ と CSJ の「短単位検索」にそれぞれ書字形出現形で「せる」「させる」を入力し検索する。用例文の単語は品詞ごとに記号「|」で区切る。
- ② 検索してヒットした用例文の集合を、エクセルの任意のファイルに貼りつける。ファイルは BCCWJ の「せる」、BCCWJ の「させる」、CSJ の「せる」、CSJ の「させる」の 4 つ作成する。
- ③ ②で作成したエクセルファイル上で使役助動詞より前の部分、使役助動詞、使役助動詞より後の部分の異なる 3 列に分け、使役助動詞の直前を見て、使役形になる頻度の高い動詞を抽出する。例えば、「|われわれ|の|ため|に|なる|ように|働か|せる|べき|で|ある|。」という文が使役助動詞より前、使役助動詞、使役助動詞より後の部分の 3 つに分かれ、隣り合って異なる列にそれぞれ入っているとすると「|せる|以降は動詞の抽出に関係しないため、その列全体の|を削除する。そして使役助動詞より前の|を一括で削除し、動詞だけを抜き出した列を作る。すると「われわれのためになるように」と「働か」と「せる」が異なる 3 列にわけられる。頻度の算出はエクセルの COUNTIF 関数等による。

以上の手順で動詞を抽出すると、「する」「持つ」「感じる」「食べる」が BCCWJ と CSJ に共通して使用頻度の上位 5 位以内に表れた。この 4 語を用いてアンケート調査を行った。

5. アンケート調査 1、2 の調査方法、判明した動詞の活用種類別頻度

5.1. アンケート調査 1、2 の調査方法

「する」「持つ」「感じる」「食べる」を五段活用化した使役助動詞を伴った形で用いた文を挙げ、それぞれ使用状況を回答してもらうアンケートを実施した。アンケートはアンケート調査 1 と 2 の 2 種類実施した。両アンケートにおいて共通した調査方法を以下に記す。

- ① 上記の 4 つの動詞の使役形を五段活用に活用させた各形式を、Twitter の「高度な検索」機能を用いて検索し、実例を抽出する。
- ② 抽出された実例を、google form を用いたアンケート調査の設問とする。設問例は「ご飯食べさすゲームは苦手だったりする。」「誰にも荷物は持たさない。」などである。
- ③ 30 歳未満の日本語母語話者に、設問文中の使役形の使用状況に関する 4 つの選択肢から、1 つを選んで回答してもらう。選択肢は「自分も言い、人が言うのも耳にする」、「自分は言うが、人が言うのは耳にしない」、「自分は言わないが、人が言うのは耳にする」、「自分も言わず、人が言うのも耳にしない」とする。

5.2. 調査 1、2 から判明した動詞の活用種類別頻度と考察

調査に用いた動詞「(漢語+) する」「持つ」「感じる」「食べる」を、それぞれサ行変格活用、五段活用、上一段活用、下一段活用の代表とする。各活用の種類の動詞について、全回答数に対する五段化回答数の割合を算出した。全回答数とは、アンケート調査 1 の回答者 33 人×回答数 30 と、アンケート調査 2 の回答者 18 人×回答数 9 の和である。五段化回答数とは、このうち「自分は言い、人が言うのも耳にする」「自分は言わないが、人が言うのは耳にする」と回答した数の和である。

表 1: 活用の種類別の五段活用化傾向

	五段化回答数	全回答数	割合
五段活用	219	318	68.9%
上一段活用	67	198	33.8%
下一段活用	152	318	47.8%
サ行変格活用	115	318	36.2%
合計	553	1,152	48.0%

五段活用化した使役助動詞が半分以上容認されているのは五段活用動詞だけである。上一段活用、下一段活用、サ行変格活用の動詞は、五段活用動詞に比べそれぞれ 35.1%、21.1%、32.7%低い。いずれも 2 割以上低い数値となっていて、この 3 つの活用の種類は五段活用動詞よりも五段活用化した使役助動詞を容認されていない。これを踏まえ次の調査では、5 割以上五段活用化した使役助動詞がみられた五段活用動詞と、終止形が「つ」である動詞に焦点を当て、3 つ目のアンケートを実施した。終止形が「つ」の動詞に着目したのは、アンケート調査 2 で用いた動詞「持つ」の五段化回答数が高くなったためである。加えて日本語記述文法研究会 (2009) が指摘する、五段活用動詞における使役受身形についても調査した。

6. アンケート調査 3 とその結果、および考察

6.1. アンケート調査 3 の調査方法と内容

アンケート調査 3 では、使役助動詞がついた用例が 100 例以上ある五段活用動詞を、4 節に記した手順で BCCWJ より抽出した。抽出した動詞は、「思う」「言う」「行う」「咲く」「聞く」「やる」「終わる」「飲む」「働く」「思い出す」「抱く」「起こす」「喜ぶ」「うかがう」「休む」「行く」「笑う」「負う」「読む」「書く」である。加えて、5.2 節で言及した「つ」で終わる動詞のうち、「打つ」「勝つ」「立つ」「目立つ」「待つ」「育つ」「保つ」も抽出した。

以上の動詞を用いて本アンケート調査を 5.1 節と同様の手順で進める。注意点として以下の点を挙げる。選択肢「自分は言うが、人が言うのは耳にしない」は、「客観的にありえない」という指摘を受け削除した。1 つのアンケートで取り上げる動詞は 5 語ずつにし、6 つの異なるアンケートを作成する。回答者は各々 6 つのアンケートのうち 1 つに対して回答し、他の 5 つのアンケートは回答していない。以下、調査結果ではそれぞれ「アンケート A, B, C, D, E, F」と表記する。それぞれのアンケートを実施した結果、A: 7 人、B: 5 人、C: 4 人、D: 9 人、E: 14 人、F: 4 人の計 43 人から回答を得た。

6.2. 活用形による使役助動詞の五段活用化への影響と考察

はじめに、用いた動詞の各活用形別に考察する。表 2 は五段化回答数が 70%以上の活用形を集計したものである。五段化回答数と全回答数の定義は、和を除き 5.2 節と同じである。

表 2: 活用形ごとの使役助動詞五段活用化頻度

	五段化回答数	全回答数	割合
使役受身	85	104	81.7%
連体	148	199	74.4%
推量	147	199	73.9%
終止	143	199	71.9%

使役受身形や終止形や連体形のときに五段活用化した使役助動詞が容認されやすいことは、日本語記述文法研究会 (2009) や湯澤 (1953) の記述を実証している。

使役受身形の五段化回答数割合が高くなった理由は2つ考えられる。1つ目は、モーラ数の削減である。「読む」を例にとる。これに下一段活用の使役助動詞をつけて使役受身形にすると「読ませられる」となる。五段活用化した使役助動詞を用いた場合、「読まされる」となる。発音しやすいのはモーラが短い後者である。2つ目は同じ母音の連続である。「読ませられる」という場合、動詞の活用形、使役助動詞、受身助動詞のはじめの母音の組み合わせが /a/, /e/, /a/ となり、2度調音位置を変える必要がある。対して「読まされる」の場合、母音の組み合わせは /a/, /a/, /e/ となり、調音位置を変えるのは1度で済み、発音しやすい。この2つの要因により、使役受身形の容認度が高くなったと推察される。

推量形の数値が高いのは、使役受身形と同じ理由が考えられる。つまり、「～せよう」から「～そう」とモーラ数が少なくなり、かつ長音だけになることで母音を変化させる必要がなくなり、発音しやすくなるためだと推察される。

6.3. 動詞の語幹末音による使役助動詞の五段活用化への影響と考察

次に、動詞の語幹末音による使役助動詞の五段活用化への影響を考察する。表3はアンケートに用いた動詞から、終止形の種類別に1語ずつ抽出したものである。五段化回答数と全回答数の定義は、和を除き5.2節と同じである。

表 3: 調査に用いた動詞ごとに見た使役助動詞の五段活用化傾向

	調査区分	五段化回答数	全回答数	割合
喜ぶ／喜ばす	C	34	44	77.3%
飲む／飲ます	B	41	54	75.9%
言う／言わす	A	51	74	68.9%
聞く／聞かす	A	50	74	67.6%
待つ／待たす	E	97	144	67.4%
やる／やらす	B	36	54	66.7%
起こす／起こさす	C	16	40	40.0%
思い出す／思い出さす	B	9	54	16.7%

「う」「く」「つ」「ぶ」「む」「る」で終わる動詞は、いずれも半分以上で五段活用化した使役助動詞を容認されている。しかし「思い出す」は 16.7%、「起こす」は 40.0%など、「す」で終わる動詞は五段活用化した使役助動詞の容認度が低い。「す」で終わる動詞全体の、五段活用化した使役助動詞の容認度は、計 94 例中 25 例、およそ 27%である。これは「起こさない」「思い出さない」など、同じサ行のモーラ連続を避けるためと推察される。

6.4. 自動詞、他動詞による五段活用化した使役助動詞の容認度への影響と考察

他動詞で五段化回答数の割合が 70%以上となったのは、紙幅の都合上載せていない動詞を含めた 16 語中、表 3 にある 2 語である。一方自動詞は、10 語中 6 語で五段化回答数の割合が 70%以上となった。この差が生じた原因を最後に考察する。なお、自動詞と他動詞を区分する基準は、便宜上新村 (2018) の見出し語に記載しているものに従う。

はじめに 10 語の自動詞に五段活用化した使役助動詞がついた形、「休ます」「喜ばす」「働かす」「咲かす」「終わらす」「笑わす」「立たす」「目立たす」「勝たす」「行かす」を BCCWJ の短単位検索で用例検索すると、「目立たす」を除き用例が見つかった。次に BCCWJ で見つかった用例のなかから、任意の用例をそれぞれ代表して 1 文ずつ抽出した。抽出した用例は、紙幅の都合上省略する。ここで、日本語記述文法研究会 (2009: 261–270) の記す使役文のタイプについて、以下 12 行にわたり要約する。

① 使役者が間接的に事態の成立に関わるもの:

ことばや身ぶりをを用いて間接的に事態の成立に関与する。能動的使役文と受容的使役文に分かれる。被使役者がその事態の成立を望む場合は受容的使役、望まない場合は能動的使役に分類される。

② 使役者が直接的に事態の成立に関わるもの:

原因的使役文と他動的使役文に分かれる。原因的使役文は「落胆する」、「納得する」など心的活動を表す動詞や、「笑う」など感情の変化によって起こる動作を表す動詞を伴う。他動的使役文は、元の動詞を自動詞とする使役文の場合に対応する他動詞がない穴を埋めるために用いられる。

③ 使役者が事態の成立には積極的に関わらないもの:

有責的使役文がある。使役者が気づかないうちに事態が進展した、使役者が有効な手だてを講じなかったため望まない事態が生じたなどの意味を表す。

この基準をもとに、コーパスより抽出した使役文の用例を分類したところ、次の結果を得た。表 4、5 では、便宜上コーパスより抽出したそれぞれの 1 文をもって、使われているそれぞれの動詞の用例全体がその使役文のタイプに分類されるとみなした。つまり項目「使役文のタイプ」は、標本調査のような手法で出した結果である。用例が見つからなかった「目立たす」に関しては省略する。

表 4: 自動詞における五段活用化した使役助動詞の容認度と使役文のタイプの関係

	BCCWJ 用例数	五段化回答数容認度	使役文のタイプ
休む／休ます	2	81.8%	間接、受容的
喜ぶ／喜ばす	30	77.3%	直接、原因的
働く／働かす	17	75.9%	直接、他動的
咲く／咲かす	19	74.3%	直接、他動的
終わる／終わらす	18	74.1%	直接、他動的
笑う／笑わす	11	72.3%	直接、原因的
立つ／立たす	7	56.3%	間接、能動的
勝つ／勝たす	1	54.2%	間接、受容的
行く／行かす	9	52.1%	間接、受容的

表 4 より、自動詞が直接的に事態の成立に関わる使役文の要素として使われている場合、五段活用化した使役助動詞が容認されやすいと推察される。容認度が 70%以上の 6 つの自動詞に、それぞれ五段活用化した使役助動詞がついた形の使役文のタイプに着目する。すると、「休ます」を除く 5 つの動詞は直接的に事態の成立に関わる使役文として使われていることが分かる。これらの動詞に五段活用化した使役助動詞が容認されやすい要因は、日本語記述文法研究会 (2009) が述べる「主体からの働きかけによって対象に変化が生じる」という他動詞の特徴が関係する。「喜ばす」「笑わす」は、別の感情からそれぞれの感情に対象が変化している。「働かす」は、精神的な能力が発揮していない状態から発揮した状態に変化している。「咲かす」は花のつぼみが閉じた状態から開いた状態に変化している。「終わらす」は続いていたものがおしまいになるという変化を示している。いずれも「主体からの働きかけによって対象に変化が生じる」という他動詞の特徴と類似している。

一方、容認度が 70%未満の 3 つの自動詞「立つ」「勝つ」「行く」に五段活用化した使役助動詞がついた形、「立たす」「勝たす」「行かす」は、間接的に事態の成立に関わる使役文の要素として使われている。これらの動詞に五段活用化した使役助動詞を伴うことが容認されにくいのは、これらの使役形の表す事態が持つ、対象を変化させる働きが弱いためだと推察される。

他動詞は、五段活用化した使役助動詞の容認度の高低にかかわらず、使役文の 3 タイプに違いが出なかった。表 5 は、調査で用いた他動詞のうち、五段活用化した使役助動詞の容認度が高い動詞と低い動詞をそれぞれ 2 語ずつ抽出したものである。

表 5: 他動詞における五段活用化した使役助動詞の容認度と使役文のタイプの関係

	調査区分	割合	使役文のタイプ
飲む／飲ます	B	75.9%	間接、能動的
言う／言わす	A	68.9%	間接、受動的
行う／行わす	A	41.3%	間接、能動的
負う／負わす	D	31.1%	間接、能動的

7. 調査全体の結論

一連の調査により得られた結果から、以下の結論に至った。これにより、4 節で筆者が立てた仮説は支持されない。

形式的な原因①: 使役受身の形式: 自動詞他動詞ともに、その動詞が使役受身形の場合は使役助動詞が五段活用化しやすい。これは、調音方法変更回数およびモーラ数の削減という発音の簡略化が関係している。

形式的な原因②: 同じ音連続を避ける: 「す」で終わる五段活用動詞に使役助動詞がついた場合はあまり五段活用化しない。これは同じサ行音の連続を避けるという音韻上の理由による。「持つ」に比べて、「感じる」「食べる」「する」が五段活用化した使役助動詞を容認されにくいのも、同じ理由による。

他動詞的機能: 五段活用の自動詞が直接的に事態の成立に関わる使役文として使われている場合、その使役助動詞が五段活用化しやすい傾向にある。この場合、当該の自動詞は他動詞のように機能することが多い。

8. 反省と今後の課題

アンケート回答者の母方言の影響を考慮しなかった。そのため方言による五段活用化の容認度の影響も視野に調査する必要がある。6 節でのアンケートには、回答者が 5 人以下のものもあり、やや客観性が欠けているものもある。そのアンケートについては、最低でも 10 人ほどの回答者に協力してもらえるように尽力すべきであった。

参考文献

- 新村出 (2018) 『広辞苑』第 7 版. 初版発行: (1955) 東京: 岩波書店.
 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 第 3 部格と構文 第 4 部ヴォイス』第 2 巻 東京: くろしお出版.
 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京: 東京堂出版.
 湯澤幸吉郎 (1953) 『口語法精説』東京: 明治書院.

参考 URL

- 日本語書き言葉均衡コーパス <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (最終閲覧日 2020/12/20)
 日本語話し言葉コーパス <https://chunagon.ninjal.ac.jp/csj/search> (最終閲覧日 2020/12/19)
 Twitter 高度な検索 <https://twitter.com/explore> (最終閲覧日 2020/10/21)